

## シンポジウム（公募）

### 「肝細胞癌治療の現状と課題」

司会 西川 浩樹（大阪医科薬科大学 第2内科（消化器内科））

犬塚 義（京都大学大学院医学研究科 消化器内科学講座）

近年、肝細胞癌治療は免疫チェックポイント阻害薬の導入を契機として大きく変化し、分子標的薬や局所治療との併用・シークエンスを含めた集学的治療戦略の重要性が高まっている。また、患者背景や背景肝疾患の多様化に伴い、診療の個別化もこれまで以上に重要となっている。

本シンポジウムでは、薬物療法、局所治療、外科治療それぞれの最新の知見と課題を整理し、実臨床における最適な治療選択のあり方について議論を深めたい。多角的視点から今後の肝細胞癌診療の方向性を共有する機会となることを期待している。

## シンポジウム（公募）

### 「IBD治療における生物製剤の最前線」

司会 新崎信一郎（兵庫医科大学 消化器内科学講座）

井上 聡子（神戸市立医療センター中央市民病院 消化器内科）

近年、炎症性腸疾患（IBD）の治療は、ステロイド依存・抵抗例に対する新規薬剤（Advanced therapy）が次々と保険収載され、急激な変化を遂げています。抗TNF抗体に始まり、抗インテグリン抗体、抗IL-12/23p40抗体、さらにはIL-23p19抗体など標的分子の異なる生物学的製剤が次々と臨床導入されるとともに、JAK阻害薬やS1P受容体調節薬といった経口投与可能な低分子薬も加わり、より多様で高度な治療戦略を必要とする時代となりました。

一方で、薬剤選択の最適化、治療シークエンス、バイオマーカーに基づく個別化医療、既存治療との併用や移行法、薬剤中止の可能性など、解決すべき課題も多く残されています。

本シンポジウムでは、IBD治療におけるAdvanced therapyに関する最新の治療成績や研究成果について幅広く議論したいと考えます。様々な視点からの演題を広く募集いたします。

## パネルディスカッション（公募）

### 「胆道癌・膵臓癌早期発見と低侵襲治療のためのチャレンジ」

司会 松本 逸平（近畿大学医学部外科学教室 肝胆膵部門）

蘆田 玲子（和歌山県立医科大学 内科学第二講座（消化器内科））

松森 友昭（京都大学大学院医学研究科 消化器内科学講座）

近年、胆膵癌の予後改善に向けて、家族歴などの遺伝素因に加え、慢性膵炎、IPMN、膵胆管合流異常症など発癌リスクを有する患者に対するリスク層別化とサーベイランス戦略が注目され、経過観察間隔の設定やEUSやERCPを含む各種検査の適応・有用性の知見が蓄積されつつある。さらに、膵癌検診や地域連携によるハイリスク症例の拾い上げ、AIを用いた画像診断支援、新規バイオマーカーに基づくスクリーニングなど新たな試みも進んでいる。治療面では、内科的アプローチとして膵腫瘍に対するEUS下エタノール局注療法や胆道癌に対するアブレーション治療が発展する一方、外科領域においては、腹腔鏡下手術やロボット支援下

手術などの低侵襲治療が普及しつつある。短期成績の報告に加え、手術手技の標準化や適応拡大などについて議論されている。胆膵癌診療においては、領域横断的な連携のもと早期診断から治療までの一貫した戦略構築が求められている。

本セッションでは、胆膵癌の早期診断と低侵襲治療における各施設から多くのご応募を期待する。

## ワークショップ（公募）

### 「消化管がん診断・治療における各モダリティ・デバイスの使い分け」

司会 上堂 文也（大阪国際がんセンター 消化管内科）

北村 陽子（市立奈良病院 消化器内科）

消化管がん診療の最善の転帰は、正確な診断にもとづく適切な治療選択によって得られる。現在、診断については画像強調観察や拡大内視鏡をはじめとする診断機器の進歩、治療については内視鏡や手術デバイスの発達、さらに外科手術や化学放射線療法を含む集学的治療の開発によって、多様な選択肢が存在する。また高齢化社会における患者の多様性も加わり、上部・下部消化管がんの実臨床において、どのモダリティ・デバイスをいかに使い分けるか、さらに手術vs. 内視鏡 vs. CRTといった治療法をいかに選択するか、悩むことが多い。本ワークショップでは、消化管がん診療における既存のエビデンスと現場の工夫を融合させながら、最適な診断法や治療法の選択を明らかにしたい。発表にあたっては対象の選択規準と、診断・治療の方法の明確な提示を希望する。各領域の第一線の知見を持ち寄り、明日からの診療に役立つ、活発で実りある討論の場としたい。

## ワークショップ（公募）

### 「消化器がん免疫療法におけるirAEの現状と対策」

司会 松原 淳一（京都大学大学院医学研究科 腫瘍内科学講座）

後藤 知之（滋賀県立総合病院 腫瘍内科）

近年、免疫チェックポイント阻害薬（ICI）は胃癌・食道癌・胆道癌・肝細胞癌をはじめとする多くの消化器がんにおいて標準治療薬の一つとして用いられ、その恩恵を受ける患者は着実に増加している。一方で、ICI使用症例数が増えるとともに免疫関連有害事象（irAE）を発症する症例の絶対数も増え、稀なirAEについても臨床現場において様々な経験が蓄積されている。また、irAEへの対応は依然として難しく、各施設で試行錯誤が続いている現状がある。

本ワークショップでは、消化器がん薬物療法におけるirAEの現状と対策について、以下の3つの視点から幅広く議論したい：①irAE腸炎・irAE肝障害などの消化器系irAEの現状と治療、②肺障害・内分泌障害など消化器系以外のirAEの現状と治療、③各施設におけるirAE対応のための体制整備。これらについて多施設の経験を集積・共有することで、消化器がん免疫療法の日常診療に直結する有意義な知見が得られると期待される。活発な討議が各施設でのより質の高い消化器がん治療につながるよう、演題を広く歓迎する。